

汪精衛南京政府下の大東亜戦争博覧会

柴 田 哲 雄

は じ め に	95
I 開催の経緯	96
II 博覧会の趣旨と展示内容	99
III 参観者の動員	105
お わ り に	108

は じ め に

汪精衛南京政府（以下、汪政権）下で日中間の協力により、1942年11月1日から12月10日にかけて、南京の玄武湖畔で大東亜戦争博覧会が開催された⁽¹⁾。大東亜戦争博覧会については、管見の限り先行研究が内外ともに皆無であり、また、例えば当時の朝日新聞においても、ベタ記事でその開幕が報道されたに過ぎないことから明らかなように⁽²⁾、同時代の日本のメディアからほとんど注目を集めることはなく、少なくとも日本では開催時においてさえも、その実態についてはよく知られていなかった。しかしながら、19世紀後半に欧米で始まり、その後日本やひいては中国でも催されるようになった博覧会の併せもつ大衆プロパガンダの機能を想起するのならば、大東亜戦争博覧会についても汪政権のイデオロギー研究の観点からは逸し得ないテーマになると思われる。

そこで、本稿では研究史の欠落を埋めるのと同時に、中国大衆に対するプロパガンダの媒体として、大東亜戦争博覧会がどのように機能していたかについて究明するものとする。先ずIで、大東亜戦争博覧会がどのような経緯を経て開催されるに至ったかを明らかにする。次いでIIで、大東亜戦争博覧会の趣旨と展示内容がどのようなものであったかを検討するが、その際、同博覧会の参観者に期待された「まなざし」⁽³⁾と、華北の新民会会員の

日本国内の戦争博覧会参観に際しての「まなざし」との比較を行なって、その相違点がどのようなものであったかを析出する。最後にⅢでは、大東亜戦争博覧会参観者の時局に対する意識や感情がどのようなものであったかを、中学の生徒の手記を例に取り上げて検討した上で、同博覧会の大衆的興行が、大衆の動員に当たって、どのような意義をもっていたかについて考察する。

I 開催の経緯

大東亜戦争博覧会が開催に至った経緯から見ていこう。寺下勅『博覧会強記』によれば、日中戦争勃発以降、日本国内で開催された博覧会数は1937年に5、1938年に26、1939年に21、1940年に20、1941年に7、1942年に3、1943年と1944年に各1という具合であり、各博覧会の名称からして、そのほとんどが戦争をテーマとしたものであったと言ってよからう。主催者については、同書で明らかにされているものの大半は、新聞社か地方自治体、もしくは地方の商工会議所であった。また同時期の朝鮮半島や満洲国における博覧会数は、朝鮮で1940年、1941年、1943年に各1、満洲で1942年、1943年に各1であり、それぞれの名称からして、いずれも日本の植民地統治の成果を誇示し、現地住民を戦争に動員することを趣旨としたものであったと思われる。主催者に関しても、同書で明らかにされているものは全て現地の新聞社であった⁽⁴⁾。

中国の占領地では、南京の大東亜戦争博覧会に先立って、北京で大東亜博覧会が、次いで天津でも同名の博覧会が相次いで開催された。北京の博覧会に関しては資料不足故に不明であるが、天津の博覧会については、『大東亜博覧会記念写真帖』からその概要の一端が明らかになっている。天津では1942年8月1日から9月10日まで開催され、主催団体は華北宣伝聯盟天津支部（在津新聞協会、天津広播電台〔ラジオ局〕、華北演芸協会天津支部、華北電影〔映画〕協会天津支部）であり、後援は天津居留民団、天津日本商工会議所、天津特別市公署、天津市商会であった。だが、同書の序文に「本博覧会をして絢爛たる大成果を挙げしめたる最大原動力が天津陸軍特務機関を始め在津各部隊の自主且俠勇的協力に基づきたるものなることを想起し、不断の敬意と謝意を表して已まざる次第なり」と記されていたことから明らかなように、実質的な主催者は天津駐留の日本軍であったと考えられる⁽⁵⁾。また博覧会の趣旨も、後述するように華北占領地域の社会を太平洋戦争に動員することに置かれていた。

北京、天津での博覧会を受けて、華中方面においても同様の趣旨の博覧会の開催が検討に付されることとなり、「外、陸、海、興各機関ノ係官ニ於テ寄々研究」させたところ、

戦争遂行中の現地において博覧会のようなお祭り騒ぎ的行事を実施するのは適当ではないとの意見も出されたが、1942年7月下旬に開催が決定された。汪政権、支那派遣軍、支那方面艦隊、帝国大使館、興亜院華中連絡部の後援の下で、大東亜戦争博覧会の主催団体となる大東亜戦争博覧会委員会が組織されたが、同委員会の人選については、評議員を除く、委員と実行委員では以下のように日本側の人員の方が多くなった。

1. 委員：国民政府 郭宣伝部次長（中国） 陸軍 岩崎報道部長 海軍 鎌田報道部長 大使館 好富報道部長 興亜院 大家調査官（以上日本）
2. 実行委員：国民政府宣伝部 鍾参事 南京特別市 薛豊宣伝処長（以上中国）
総軍報道部 志生野中佐 同 鷹尾中尉 海軍武官府 赤木少佐 同 夏目囑託 大使館 松平書記官 同 松尾官補 興亜院 岩城調査官 同 本野調査官（以上日本）⁽⁶⁾

日本側において実質的に博覧会の開会準備の責務を担ったのは、委員の総軍報道部長岩崎大佐、及び実行委員の同部員志生野中佐、同鷹尾中尉などであり、また請負業者には当時国策会社となっていた乃村工藝社が選定された。鷹尾中尉の回想によると、大本営報道部に、東京から博覧会の企画・設計・施行の権威者の派遣を求めたところ、二つの選択肢が提示された。すなわち、「日本文化の水準を誇示する建築様式を採用するなら、一九三三年シカゴ万国博で日本館の展示設計を担当した山脇巖教授が最適だし、大衆啓蒙をねらってパノラマ展示に重点を置くなら、靖国神社の外苑展示で優秀な技術を発揮し、陸海軍の信頼厚い乃村工藝社が期待に應えるだろう」とのことであった。そこで、山脇巖と乃村英一両者が招聘され、関係者の間で各々の試案に基づく図面が比較検討された結果、後者の案が支持され、乃村工藝社に一任することとなった。南京に現地入りした乃村工藝社のスタッフには、先の乃村英一及び製作総指揮の乃村清三、その他画師四十名、大工職二十名、造型、塗装、表具、電気の各職方が入っており、総勢で百名余りに上った⁽⁷⁾。

また、費用に関しては、陸軍と海軍がそれぞれ10万円ずつ、外務省と興亜院がそれぞれ5万円ずつ負担することとなったほか、汪政権が10万円支出することとなった。その上に、南京と上海の民間有力者にも賛助金を求めたところ、南京商工会議所より1万5千円が、上海商工会議所より15万円が、それぞれ拠出されるに至った⁽⁸⁾。開催に当たって計上された費用の額が当時としてはいかに破格であったかということは、乃村工藝社が以下のよう書き記していることから理解し得よう。

「玄武湖博」の単独施行は乃村にとって実に大きな意味を持ちました。三十五万円という請負額は、……しばしば言及する靖国神社の外苑展示一回の請負額が約二万円ということでしたから、ほう大なものだったといえます。乃村工藝社の戦中の経営基盤にほとんど決定的な役割を果たしたであろうことは容易に想像されます。そして、このことがまた、いちはやく戦後の再起をも可能にしたのでした⁽⁹⁾。

ところで、上述のように汪政権は大東亜戦争博覧会の後援に名を連ねて、費用の一部を負担しただけでなく、パビリオンの設営に際しても、「大東亜共栄館ハ外務省ニ於テ興亜院、国民政府ト共ニ之ガ陳列ニ当ル予定ナリ」とあるように、一部関与していた⁽¹⁰⁾。しかし、日本側がそもそも大東亜戦争博覧会の開催を発案し、主催団体の博覧会委員会の人選でも、日本側のスタッフの方が多く、実際に企画や施行に携わったのも日本の国策会社であり、日本側が費用の過半を負担したことからも明らかな通り、実質的に博覧会は日本の主導の下で推し進められたのである。

しかしながらプロパガンダの面では、日本側が後景に退き、汪政権が前面に出てくるように演出された。開幕式に汪精衛が出席した際の情景を、汪政権の機関紙『中華日報』は、午前10時ちょうどに「汪主席が灰黒色の背広姿で颯爽と到着すると、大東亜博覧会の全委員が会場の門前で起立して、恭しく出迎えた」と描写した⁽¹¹⁾。しかし、実際には『中華日報』の報道のように汪精衛の面子が保たれたわけではないようである。博覧会委員会における五人の委員のうち、ただ一人汪政権側の委員であった郭秀峰宣伝部次長は、戦後になって以下のように開幕日の汪精衛の様子を回想していた。

…午前九時に汪精衛が偽宣伝部長の林柏生に付き添われて会場に到着した時、正門の外では軍隊と警察が林立している様子が目に付くばかりであった。汪精衛は状況を見て取るや、西尾寿造支那派遣軍総司令官がすでに到着していることを知り、心中ひどく不愉快になった。この博覧会が宣伝部の主催である以上、中国側が主であり、日本側が客であって、主人が先に来て客人を接待するべきであるのに、どこに客人が先に来る道理があろうかと考えたからである。そこで自動車が会場の正門前に着くと、汪精衛は停車を命じ、下車して脇道から大回りして会場に入っていった。随行の参観者もまた自動車から下りて後に従った⁽¹²⁾。

上述のささいな行き違いを通して、大東亜戦争博覧会が日本の主導の下で推進されたことに対し、汪精衛が大いに不満をもっていたことが見て取れるだろう。博覧会の運営で主

導権を握れなかった汪政権は、以下で見るように、メディアや要人の会見等を通して各パビリオンの展示に関する解釈を披瀝することで、主催者としての立場をアピールすることとなった。

II 博覧会の趣旨と展示内容

大東亜戦争博覧会の開催趣旨とはどのようなものだったのだろうか。同博覧会委員会は以下のように明示した。

大東亜戦争ノ意義ヲ闡明シ日華提携ニ依リ聖業完遂ニ邁進スル熱意ヲ昂揚シ以テ重慶側抗戦意思ノ崩壊ヲ促進ス之ガ為

(一) 皇軍ノ赫々タル戦果及必勝不敗ノ実力ヲ明示ス

(二) 大東亜共栄圏ノ実情ヲ紹介スルト共ニ日本及国府ニ対スル信頼ノ念ヲ向上セシム

大東亜戦争博覧会において、(一)と(二)の目的に沿って作られたパビリオンは、それぞれ大東亜戦争館と大東亜共栄館である。大東亜戦争博覧会には全体でこの二つのパビリオンしかないが、博覧会と銘打っている割にパビリオン数が極端に少ないのは、戦時下において資材が貴重になっているが故に、徹底的にパビリオン数を節減したからである⁽¹³⁾。

一方、先述した天津の大東亜博覧会の開催趣旨は「一、大東亜戦争の真意義闡明 二、華北産業の実情展示 三、兵站基地としての天津の性格再認識」とされ、南京の博覧会の趣旨と比較すると、三の趣旨内容に見られるように、中国ナショナリズムに対する配慮が希薄であり、より日本軍の意向が色濃く反映されていたと言えよう。また、パビリオンに関しては、南京の博覧会よりもはるかに多く、大東亜館、戦利品館、工業館、新民館、華北開発館、広播（放送）館、農産館、畜産館、商工廻廊、大東亜海館、大東亜会館、文教館、新興資材陳列館が設けられていたが、その展示の中身に関しては資料不足から不明である⁽¹⁴⁾。

大東亜戦争館

まず、大東亜戦争館の展示内容から見ていくことにしよう。館内の左右の両側には日本軍の戦勝状況を描いた油彩画が中心に展示されていた。また右側の列には、シンガポール

攻略図が展示され、そこでは実際のシンガポールの外観や海洋の風景が絵幕に再現されているだけではなく、模型のオートバイ隊が進攻している模様が再現されていた⁽¹⁵⁾。こうした油彩画の出来映えについては、開幕日に参観した周佛海が日記に「戦闘を描いた各種油絵は一見の価値がある」と書き記すほどのものであった⁽¹⁶⁾。

また大東亜戦争館の内外には、捕獲された英米軍の兵器が陳列されていた⁽¹⁷⁾。こうした捕獲兵器については、『中華日報』の社説が次のように注釈していた。「英米を盲信する人々は往々にして英米の力が偉大であると考え、その力の偉大さが兵器の性能の高さに表れているとしているが、実際には全てがそのようであるわけではないのである」。(社説の執筆者が) 1933年に香港政府が催した「海軍の日」に英国の航空母艦を見学したところ、艦載されている大砲が1912年製造という旧式のものであることを見出したが、「いわゆる兵器の性能の良さとは、元々そのようなものに過ぎないのである」。戦前に英米は増援と戦争準備を叫んでいたものの、「博覧会で展示された捕獲兵器を見ても、依然として旧式のままであった」。そのことはまさに、英米が「作戦で用いた兵器の故に敗れた」ことを意味しているのであると⁽¹⁸⁾。

日本軍の戦勝状況を描いた油彩画や旧式のものとした英米の捕獲兵器の展示によって、「皇軍ノ赫々タル戦果及必勝不敗ノ実力ヲ明示ス」る必要性に駆られた要因を、ここで考察することにしよう。その要因としては第一に、中国人の間に広まり始めた日本軍の敗北必至という見通しを払拭する必要性が出てきたことが挙げられるであろう。例えば、周佛海が日本軍の戦勝を目の当たりにして、その軍事力にある程度の信頼を寄せるに至った太平洋戦争緒戦の段階でさえも、その日記に書きとめられたように、依然として重慶政権は「英、米の経済力は日本をはるかに上回り、一時的な軍事敗北は勝敗に関係なく、最終的には日本は必ず経済戦によって敗北すると見なしている」⁽¹⁹⁾ のであった。こうした重慶政権側の見通しを共有する者が、太平洋戦線での日本軍の劣勢に伴って、後に秘密裏に重慶政権に投降を申し入れる周佛海をはじめとする汪政権関係者をも含めて、占領下の社会において増加していったことは想像に難くないであろう。

他方で、日本軍の勝利を確信するか否かは、対日協力者になるか否か、ひいては汪政権の支持者になるか否かの重要な分岐点であった。重慶政権によれば、漢奸には積極的なものと消極的なものの二種類があるとされ、前者は更に失意の軍政分子と下層階級の民衆に二分され、また後者についても、「恐日病」患者と奸商という二種類に分けられるとした。そして、「恐日病」患者について以下のように説明していた。

この種の人々は元々漢奸と言うことはできないのである。彼等は失意の軍人や政客

でもなく、また生活の保障がない下層階級の民衆でもなく、逆にその大多数は高官職にあり、手厚い俸給を享受している中央あるいは地方の現職の官僚である。しかし、彼等は日本に対しておしなべて恐怖心を抱いているために、そのあらゆる措置はいつしか敵に極めて大きな便宜を与えることになってしまっており、国家が権益を喪失し、あるいは多くの復興の機会を失うような事態に立ち至らせているのである。こうした「恐日病」の原因は、ある者の場合には自らの体験による「一面的」な事実に基づき、我が国が依然として日本に対抗し得ないと考えていることにあるのだ⁽²⁰⁾。

これまで「恐日病」に取り付かれて、対日協力を行ない、汪政権に参加したり、あるいは支持を与えたりしていた多くの人々が、太平洋戦争の進展につれて、重慶政権と同様に、日本の敗北必至と考えるようになってきたであろうが、上述の『中華日報』の社説は、まさにそうした動揺する人々に対して、大東亜戦争博覧会の参観を通して、再度日本軍必勝の信念を吹き込むものであったと言えよう。

汪政権は、動揺分子に対して日本軍必勝の信念を吹き込むだけでなく、さらに進んで、アヘン戦争以来中国社会に根付いていた反アングロ・サクソンのナショナリズムに訴えて、中国の参観者に日本軍の対英米戦が中国の反植民地闘争の一環であると認識させようとした。上述の『中華日報』の社説は、大東亜戦争博覧会に展示されている英米両国の捕獲兵器が旧式のものであると述べた後、さらに次のように捕獲兵器と中国とを結び付けた。

英米によるこうした兵器を用いての中国及び東亜への侵略は百年にわたっており、今日になって大東亜戦争の勝利と友邦将士の勇敢な戦闘により、侵略勢力はようやくにして駆逐され得たのである。こうした侵略の恃みとなった道具が運び込まれて、陳列されることとなり、我々は目にした後には、実に無量の感慨を覚えるものである⁽²¹⁾。

また、博覧会の目玉の一つであった模型の戦艦「大東亜号」が、その展示の意義を、中国「国民がさらに深く認識できるようになるために」、汪精衛自身によって「長城号」へと改名された⁽²²⁾。そうした改名もまた、中国の参観者をして、日本の軍勢力を中国のそれと一体のものとして認識させ、ひいては上述のように日本の対英米戦を中国自身の戦争でもあると認識させることを意図したものであると言えよう。

大東亜共栄館

次いで大東亜共栄館の展示内容を見ることにしよう。大東亜共栄館は中国、日本、その

他の三部に分かれていた。中国部の展示の内容は、汪政権の治世の実績を称揚するものであり、上述のように汪政権が出品に関わっていたものと推測される。一方、日本部のそれは、主として日本の軍事生産力を誇示するものであった⁽²³⁾。なお、日本部の展示では構想時に「日本科学ノ優秀性ヲ宣伝」するために、当時開発の途上にあったテレビの搬入が検討されたが、諸々の事情により実現されなかった⁽²⁴⁾。またその他の部の図表等による展示内容は、ゴム、錫等の英米が失った南洋資源、南洋の風俗や物産等についてであった。さらに大東亜共栄館広場における図表等による展示内容は、日本軍の東南アジア占領と復興がテーマとなっていた⁽²⁵⁾。

大東亜共栄館は上述のように中国、日本、その他の三部構成であったが、一方、南京の大東亜戦争博覧会の直前に、福岡で開催された大東亜建設博覧会では、同じく乃村工藝社が一部手掛けていたものの⁽²⁶⁾、同名のパビリオンである大東亜共栄館の構成は全く違ったものとなっていた。福岡の大東亜共栄館の構成は、「大陸の部（満蒙、沿海州、北中南支の紹介） 南西太平洋地域の部（仏印、比島、泰、ビルマ、蘭印、南洋諸島、濠洲、ニューギランド、ニューギニア、印度等紹介） 印度の部（印度洋より近東地方、アフリカ東部に及ぶ地域の紹介） 太平洋の部（ハワイ、東、北太平洋地域アラスカ、中米、南米其他）」というものであり、日本の部は含まれていなかった。また展示の趣旨も、「大東亜資源の開発と国防資源との関係」を明らかにしつつ、大東亜共栄圏民族が「日本を盟主として」、大東亜建設に邁進する姿をも示すというものであった⁽²⁷⁾。中国を含む大東亜共栄館に展示されていた国や地域は、まさに「盟主」に擬された日本の参観者によって「まなざされる」存在と化していたのである。

ここで、南京の大東亜共栄館において中国部と日本部が並置された構成の意図について考察することにしよう。宣伝部長の林柏生は、開幕日の記者会見での談話で、博覧会参観に当たって次のように二つの点を強調した。第一点は孫文の大亞洲主義についてであった。約七十年前に明治維新が成功し、孫文が幼少であった頃、「アジアは英米の侵略下にあり、南洋各地は前後して侵略主義者の植民地へと落ちぶれていった」。幸い日本が立ち上がり、日露戦争によって侵略主義者に打撃を与えた。一方、「中国の民衆もまた国父の指導の下で中国の復興、中日の合作、東亜の解放を求めて不断に闘争し、こうした闘争は前後して七十年に及んでいるのである」と。

第二点は汪精衛による大亞洲主義の継承と発展についてであった。七年前の開幕日と同じ11月1日に、暴徒によって狙撃された汪精衛は当時、「国父の遺教に基づき、既定の方針に従って、中日関係の好転を図り、かつ日独伊防共協定への参加を主張し」、「同時にリースロスの法幣政策に反対し、それによって中国が英国に愚弄され、中日関係を收拾不可能

な危機に陥れないように努めていた」。七年前の今日、「汪主席が流した熱血は、中日両国の志士の心に東亜解放の多くの花を咲かせ、ついに二大民族に血溜りの中から痛切に反省させることとなり、共通の前途のために協同で奮闘するように仕向けたのである」と⁽²⁸⁾。

このように孫文の大亞洲主義を汪精衛が継承し、中国と日本が協同でアジア解放のために対英米戦を遂行するということこそが、汪政権が大東亜戦争博覧会に託した理念なのであり、大東亜共栄館に中国部と日本部が並置されたことは、まさにその理念を体現したものとえよう。無論のこと日本側も汪政権の意を汲み取って、中国部と日本部が並置されるようにパビリオンの設営に当たったのであろう。また汪政権は大東亜共栄館の展示構成や林柏生の談話等を通して、中国の参観者に次のようなことを体得させようと意図していたのであろう。中国が日本に「まなざされる」存在ではなく、日本と同じ視点から、その他の部や大東亜共栄館広場での展示対象であった日本軍占領下の南洋諸地域を「まなざす」存在であることを。

新民会の大東亜建設博覧会における「まなざし」との比較

ここで、南京の大東亜戦争博覧会の参観者に期待された「まなざし」と、乃村工藝社もその一部を請け負い⁽²⁹⁾、1939年4月から5月にかけて西宮で開催された大東亜建設博覧会における、華北地域の中華民国臨時政府（汪政権成立後には華北政務委員会）の新民会関係者の「まなざし」とを比較することにしよう。新民会とは、1937年12月に北京で中華民国臨時政府が樹立された際に、満洲協和会に範をとって組織された民衆教化団体である⁽³⁰⁾。新民会を代表して、友松という中国人の同会会員は、西宮の大東亜建設博覧会に派遣され、帰国後に新民会の中国語の機関誌『新民週刊』に手記を寄せた。手記そのものは、友松という人物が書いたものであるが、掲載誌が新民会の機関誌である以上、その大東亜建設博覧会への「まなざし」は、友松一個人を越えて、新民会の中国人会員全体で共有されるように期待されていたと言ってもよからう。

西宮の大東亜建設博覧会において最も注目を集めたのは、開会の祝辞で陸軍大臣の板垣征四郎が述べたように、「空、海、陸の見事な共同作戦による立体的大包囲戦で戦史に比類なき戦果を収めた武漢三鎮攻略戦況の立体的解説」となっている大パノラマであった⁽³¹⁾。友松は西宮球場に設営された武漢三鎮攻略大パノラマを見た印象を、以下のように書き記した。

…その下の山の洞穴を通ると、武漢攻撃戦の大模型があり、参観者はここに至ると、世界戦史において凄壮無比の武漢三鎮攻撃の戦場に臨んでいるという感慨を抱くであ

ろう。面積は一万坪（五十華畝にほぼ相当）あり、山水もしつらえられている。勇猛な作戦を演じている無数の木像の兵士、軍用機の爆撃による土のくぼみ、大砲の炸裂による弾痕は、参観者をしてしきりに驚かすのである。場内における人民の住居の間には木々や竹林があしらわれており、江南の趣が十分に醸し出されている。武漢三鎮の縮図の上には特製の模型軍用機があり、しばしば硝煙と音響によって当時の爆撃の状況を再現している。果てしない長江の濁流の下流では、日本海軍の遡行部隊による攻撃の状況を目にすることができる。長江沿いの南北の山岳地帯がトーチカや塹壕といった障害物のようにになっており、このことから戦闘の激烈さを想像することができる。

以上の記述から明らかなように、武漢三鎮攻略大パノラマを前にして、友松の「まなざし」は、中国人でありながら、完全に日本の中国に対する帝国主義的な「まなざし」に同化していると言えるだろう。ひいては友松の手記を読む中国人の新民会会員も同様にその「まなざし」に同化するよう期待されていたのである。こうした帝国主義的な「まなざし」にさらされる中国像は、中国ナショナリズムの反アングロ・サクソン感情に訴えて、日本の対英米戦を中国の反植民地闘争と見立てようとした大東亜戦争博覧会の大東亜戦争館においては、意図し得ないものであった。

また、友松は「新東亜めぐり」の会場を一周した際、蒙疆広場ではパオを目にしたり、モンゴル人によるモンゴル相撲のパフォーマンスを見たりして、「塞外の情緒が濃厚であった」と感想を記すなどしていた。こうした記述にも見られるように、日本軍の占領方針の下に分断された内モンゴル等を、友松は日本の参観者同様にエキゾティシズムを覚えながら「まなざす」ようになっており、ひいては他の中国人の新民会会員もそのように「まなざす」ように期待されていたのであろうが、友松の「まなざし」は、大東亜戦争博覧会の大東亜共栄館での展示意図とは全く相容れなかったであろう。先述したように、大東亜共栄館の展示意図は、あくまでも中国が日本に「まなざされる」存在ではなく、日本と同じ視点から南洋諸地域を、時にその風俗や風物に対してエキゾティシズムを感じながら「まなざす」存在であることを体得させることにあったからである。こうした新民会会員の「まなざし」や先述した天津の大東亜博覧会の概要から、汪政権と比較して、華北の親日当局がよりはなはだしく日本に隷従していた有様を見て取れるであろう。逆に言えば、汪政権は新民会や華北政務委員会に比べて、より強力に中国ナショナリズムの立場を訴えてきたのであり、また後述する中学生の手記に見られるように、同政権下の大衆においてもナショナリズムの感情は根強く伏在していたのである。

ところで、友松の「まなざし」が日本側の中国に対する「まなざし」と完全に同化した背景には、新民会機関誌という媒体自体に執筆の制約があったことは無論のことであろうが、それ以外にも彼の個人的な日本人の国民性に対する崇敬の念があった。例えば、友松が西宮行きの途上で鉄道に乗った際、「全車中には一人として二人分の座席を占める者はなく、婦人や子供には傍らで立たせておき、気ままに果皮を捨てたり、ところかまわず痰を吐く様を目にしたりはしなかった」とのことで、「日本国民の旅行道徳の普及振りは、とりわけ我々の敬服に値するものである」と記していた。また、北支館の設営準備に当たっていた際、一緒に作業していた日本の女性事務員の働き振りを見て、「努力し、苦勞に耐え、全然倦むところがないのは、実に日本女性の特徴であり、我が国の教育者がこの点について注意し、提唱するよう大いに望むものである」と書き加えていた⁽³²⁾。

本節の最後に、汪政権のプロパガンダ工作における大東亜戦争博覧会の位置付けを見ることにしよう。それはまさに、汪政権が参戦後の1943年6月に制定した「戦時文化宣伝政策基本綱要（以下、基本綱要）」の一部を先取りするものであったと言えよう。例えば「基本綱要」では、「中国は対英米宣戦を行ない、友邦の日本と力を合わせて大東亜戦争を完遂するものであり、軍事、経済を問わず必勝を期するものであって、国民に徹底的に国府の参戦と友邦協力の意義を認識させ、国民総力を挙げて参戦するに際しての精神と努力を励ますものである」としたが、大東亜戦争館の展示はまさに日本の対英米戦争を中国大衆に中国自体の戦争として捉えさせる試みであった。また、「基本綱要」では、「国父遺教、三民主義及びその重点たる大亞洲主義は中華復興と東亜保衛の最高指導原理である」としたが⁽³³⁾、上述のように、こうした理念もすでに大東亜共栄館の展示構成に反映されていたのである。

Ⅲ 参観者の動員

大東亜戦争博覧会の参観者数は一体どれくらいになったであろうか。日本外交当局の報告書によると、11月1日の開幕式から12月10日の閉幕式までの間に、「南京、上海、漢口地区ハ言フニ及バズ遠ク蒙疆北支ノ各地ヲ始メ宜昌、岳州、舟山列島方面ヨリモ多数ノ来観者アリ」とのことであり、最終的には「約五十万ニ達スル入場者アリ」とされた⁽³⁴⁾。

もっともこの五十万人の入場者の中には、正確な動員数は不明であるが、汪政権による組織的な動員も含まれていた。動員されたのは主として地方政府関係者や小中学の生徒であり、こうした「学生生徒軍人警官等ノ団体入場者ニ対シテハ入場無料ノ特典」が与えられた⁽³⁵⁾。地方政府関係者の動員の事例としては、例えば、徐州では各界人士が、揚州で

は中国合作社江都支社の全職員が、崑山では県政府各機関から派遣された職員が、各地方の新聞社の代表が、それぞれ参観団を組織し、大東亜戦争博覧会を参観したとのことである⁽³⁶⁾。また、小中学の生徒の動員の事例としては、例えば、宣伝部が立てた日程計画通りに、南京市内の市立及び私立の各小中学が自校の生徒の博覧会参観を実施するように、宣伝部は南京市政府教育局に対しその指導監督を命じたということがあった⁽³⁷⁾。その上に、大東亜戦争博覧会委員会は、博覧会をテーマとした懸賞付きの作文、油彩・水彩画、写真のコンクールを催し、参観した「各学校の生徒に幅広く参加してもらうために」、その作品提出の締切日の延長を決定したとのことであった⁽³⁸⁾。このように特に小中学の生徒に対しては、大東亜戦争博覧会の趣旨の浸透を図るために、博覧会への参観を強制したばかりではなく、事後には懸賞付きのコンクールを催したのである。

では、当時の動員された小中学の生徒は、大東亜戦争博覧会の参観に当たって、時局に対してどのような意識や感情を抱いていたのだろうか。占領下の当時の青少年の意識を表した同時代の刊行資料は乏しいが、上海の名門校、上海徐匯中学の冊子、『上海徐匯中学卅一年度学業成績展覽会紀念冊』はそのような状況下にあって、例外的とも言える資料である。その冊子は、太平洋戦争開戦に伴う上海租界占領後の1942年に編纂されたものの、出版社、出版年月等の奥付きもなく、冊子の性格上、学内関係者や生徒の父兄にしか配付されていなかったと見られる。この冊子に収録されている同中学の生徒の手記を手がかりにして、当時の青少年の時局に対する意識や感情を考察することとしよう。

葉徳礼という生徒は「秋の夜の読書」というエッセイのなかで、以下のように書き記した。

…月夜に弟のことを思い起こすという杜甫の詩「戍鼓斷人行」を読むと、たちまち悲しみの涙が心の底から目の縁にまで湧き起こってきた。あたかも国境のとりでの太鼓の音が聞こえるばかりでなく、さらには戦場における銃砲と飛行機の爆撃が私の愛しい故郷を焼き払って、一片の焦土にしてしまった音が聞こえるかのようである。より一層痛ましいのは、祖母がその知らせを受けて、あろうことか憂悶が胸に積み重なり、ひとたび病気になるや起き上がれなくなり、薬石効なしとなったことを思い起こすことである。祖母は、私たちが命からがら逃げて避難している際に、急死してしまった。ああ！痛ましいことよ！この上どのような詩が私の痛ましい悲しみを表現することができようか？…私は続いて杜甫の「工部月夜」という詩を読んだが、「有弟皆分散」という句を目にすると、真に悲しみの上に悲しみを加えることとなり、思いの限り大声で泣き叫び、戦場で亡くなった長兄のために泣いたのである⁽³⁹⁾。

当時の少なからぬ小中学生が、上述のエッセイの作者、葉徳礼のように、日中戦争において肉親の死を経験し、その記憶をずっと持ち続けてきたことは想像に難くないであろう。そしてそのような個人的な経験も相俟って、二度と他国の侵略を被らないように、中国を富強の国家に築き上げたいという素朴な反日ナショナリズムが子供心に芽生えてきたとしても不思議はないであろう。例えば、董時鼎という生徒は、「子供を軽んじてはならない」という文章の中で、以下のように述べていた。

子供を軽んじてはならない！子供にはなおも万能な両手があるのではなかろうか？この両手は労働を喜び、活動を恐れず、将来大きくなったら、創造することができ、発明することができ、また飛行機を操縦することができ、潜水艦を操縦することができ、最も大きな大砲を発射して、我々の仇敵を爆撃することもできるのである。

子供を軽んじてはならない！子供は中華民国の未来の主人公であり、子供の愛国心は血のように赤く、子供の是非の心は明瞭である。我々勇敢で健康な子供たちが、大中華民国を世界第一の国家に作り上げ、我々中華民族を世界第一の民族に作り上げるように、私は希望するものである⁽⁴⁰⁾。

日本軍の侵略により肉親の死を経験し、素朴な反日ナショナリズムを抱くに至った、少なからぬ小中学の生徒が、仮に大東亜戦争博覧会の参観を強制されたとしても、その展示の趣旨が一体どこまで彼等に浸透し得るかは疑問であろう。せいぜいのところで、英米軍の兵器が日本軍のそれよりも旧式であることから、日本軍の敗北必至という見通しが誤りであることを認識させるに止まったであろう。生徒に日本の対英米戦を中国の反植民地闘争の一環であると認識させようとし、また中国が日本に「まなざされる」存在ではなく、日本と同じ視点から、南洋諸地域を、「まなざす」存在であると体得させようとする試みは、狙い通りにはいかなかったものと推測される。小中学生の大東亜戦争博覧会の展示趣旨に対する、こうした予測され得る反応からも、大東亜戦争館や大東亜共栄館の展示内容だけでは、非強制的に何十万もの人々を動員するだけの魅力に乏しかったものと思われる。実際、前出の郭秀峰は、玄武湖における海戦場面がいかにももっともらしくしつらえてあっても、「参観者は喜んだりしなかった」と回想していた。

そこで、大東亜戦争博覧会委員会は会場に演劇場を設営し、「参観者を惹き付けるために、上海映画界の張善昆が率いる映画スターの代表団を招待し」たりするなど⁽⁴¹⁾、ほぼ連日に渡って大衆の興行の充実に努めた⁽⁴²⁾。演劇場での様々な大衆の興行のうち、最も参観者を動員したのは、言うまでもなく映画スターの歌謡コンサートであった。例えば11月8

日に映画スターの歌謡コンサートが催されたが、「普段、上海の映画スターを目にすることのない南京では」、多くの人々が「『三人のスター』（李麗華、襲秋霞、白光）を一目見たさに、千里をも遠しとせずにやって来た」。観衆の殺到振りは、「城門口から会場までずっと押し合い圧し合い」するほどであり、また「チケット売り場の入り口には数千人が詰め掛けていた」ところへ、なかには「多くのチケットを買って、外で一手に売りさばき、その売り上げが原価の倍、もしくは倍以上になった」者も現れた⁽⁴³⁾。四十日間の会期において、一日の参観者数が一万人余を下らないとされ⁽⁴⁴⁾、総計で約五十万人に達した要因には、映画スターの歌謡コンサートを始めとする大衆的興行の成功があったと言えるだろう。

おわりに

先ず、大東亜戦争博覧会の開催の経緯についてであるが、中国側の関与もある程度認められたものの、実質的には日本側が主体となって推進していた。主催団体の博覧会委員会の人選では、日本側の人員が汪政権関係者よりも多数を占め、実際に企画や設営を請け負ったのも日本の国策会社であり、費用に関しても、日本側がその過半を負担していた。しかし汪精衛は、同博覧会はあくまでも中国側が主体となって運営するべきであると考えていたことから不満を募らせており、汪政権はメディアや要人の会見等を通して、展示に関する解釈を披瀝することで、主催者としてのアピールを行っていた。

さて、こうして開催に至った大東亜戦争博覧会は、汪政権が参戦後に策定した「戦時文化宣伝政策基本綱要」の一部を先取りするものであり、大東亜戦争館と大東亜共栄館という二つのパビリオンは、それぞれ「皇軍ノ赫々タル戦果及必勝不敗ノ実力ヲ明示ス」と「大東亜共栄圏ノ実情ヲ紹介スルト共ニ日本及国府ニ対スル信頼ノ念ヲ向上セシム」という二つの趣旨に対応して建設された。大東亜戦争館では、主として日本軍の戦勝場面を描いた各種の油絵や「旧式」とされた英米軍の捕獲兵器などが陳列されていた。『中華日報』は、同館の参観を通して、太平洋戦争の進展につれて増えてきた、重慶政権と同じく日本の敗北必至と考えるようになった人々に対して、日本軍必勝の信念を吹き込もうとし、さらにはアヘン戦争以来の反アングロ・サクソンのナショナリズムに訴えて、人々に日本の対英米戦を中国の反植民地闘争の一環として認識させようとした。一方、華北の新民会会員による日本国内の戦争博覧会参観においては、その「まなざし」は完全に日本の中国に対する帝国主義的な「まなざし」に同化してしまっており、かつ新民会の中国人会員全体にその「まなざし」への同化が期待されていた。英米帝国主義との闘争を趣旨とする南京の大東亜戦争館では、新民会会員に求められた日本の帝国主義によって「まなざされる」中国

像はあり得ない代物であった。

また大東亜共栄館は中国・日本・その他の三部構成をとっており、日本国内の戦争博覧会の大東亜共栄館における日本部を欠落させていた構成とは異にしていた。大東亜共栄館において、中国部と日本部を並置した意図とは、孫文の大亜洲主義を汪精衛が継承し、中日両国が協同で対英米戦を遂行するという理念を体現させることにあり、中国の参観者に、中国が日本に「まなざされる」存在ではなく、日本と同じ視点から、その他の部における日本軍占領下の南洋諸地域を「まなざす」存在であることを体得させることにあった。一方、新民会会員は日本国内の戦争博覧会において、日本軍によって分割された内モンゴル等を、日本の参観者と同様に「まなざす」ようになっていたのであって、新民会の中国人会員全体にもそうするよう期待されていた。大東亜戦争博覧会において汪政権が意図していた参観者の「まなざし」と新民会の中国人会員に求められていた「まなざし」が対照的となっていた有様が見出されるだろう。こうした対照の背景には、華北の親日当局に比して、汪政権がより強力に中国ナショナリズムの立場を打ち出しており、日本側も一定程度その立場を尊重せざるを得なかったことがあるだろう。

もっとも、汪政権下の大衆のナショナリズム感情は同政権が考えた以上に強いものであった。小中学の生徒や地方政府関係者などは強制的に大東亜戦争博覧会参観に動員されたが、当時の生徒の時局に対する意識や感情は、日本軍の侵略により、肉親の死を経験したりしたことによって、素朴な反日ナショナリズムに彩られていた。そうしたことから、参観を強制されたとしても、展示趣旨の浸透レベルは、せいぜいのところで、英米軍の兵器が旧式であることから、日本の敗北必至という見通しは誤りであると認識させるに止まったであろうと推測されるのであり、また二つのパビリオンの展示内容だけでは、非強制的に何十万もの参観者を動員するだけの魅力に乏しかったであろう。そこで、博覧会委員会は大量の参観者を動員するために、演劇場を設け、会期中連日のように大衆的興行に力を入れ、上海から映画スターを招いて、歌謡コンサートを催すなどしたのである。博覧会委員会は計画当初、「従来日本各地に流行せる自由主義的産業博覧会の型式を一擲し、専らパノラマ及鹵獲兵器等」を博覧会の中心に据えると意気込んでいたが⁽⁴⁵⁾、結果的には「自由主義的産業博覧会」と同様に、大衆娯楽を織り交ぜることによって、総計で約五十万人もの動員を達成して、まずまずの興行的成功を勝ち得たのであると言えよう。

註

- (1) 事前の計画では、会期は11月1日から同月30日までであったが、「連日満員ノ盛況ヲ呈シ好評嘖々タルモノアリタルニ付客月下旬ニ至リ博覧会委員会ニ於テハ十二月八日ノ大東亜

戦争一週年記念日迄延期方決定シ…十日閉幕式ヲ举行セル」とあるように、会期途中で12月10日までの延長を決定したのであった。アジア資料センター（以下、JACAR と略）：B04012268800（第52画像目から）、本邦博覧会関係雑件 20. 大東亜博覧会（I-1）、外務省外交史料館。

- (2) 『朝日新聞（東京本社）』、1942年11月2日付け。
- (3) 「まなざし」という用語は、吉見俊介『博覧会の政治学』、中公新書、1992年から借用した。19世紀後半から20世紀前半にかけての欧米の植民地をテーマとした博覧会では、植民地集落が再現され、連れてこられた原住民たちが展示されるなどして、欧米社会の帝国主義的な「まなざし」にさらされていた。日本も当初、欧米の博覧会に対して、欧米人のジャポニズムに訴え、自らを「まなざされる」客体として呈示していったが、他方で自らもまた帝国主義の道を歩み、周囲の社会を「まなざす」ようになって、内国博に植民地主義的な展示方式を導入していくのであった。日本の例に見られるように、「まなざし」の主体と客体は画然としたものではなく、その時々文脈によって主客が入れ替わるものであると言えよう。
- (4) 寺下勅『博覧会強記』、エキスプラン、1987年、同書末尾の「博覧会年表」を参照。
- (5) 林正義編『大東亜博覧会記念写真帖』、天津大東亜博覧会事務局、1942年。
- (6) 前掲、JACAR: B04012268800（第29画像目、第43～44画像目、第31画像目、第49画像目から）。
- (7) 乃村工藝社 社史編纂委員会『70万時間の旅Ⅱ』、乃村工藝社、1983年第2版、113、107～108頁。
- (8) 前掲、JACAR: B04012268800（第29～30画像目、第36画像目、第44画像目から）。
- (9) 前掲、乃村工藝社 社史編纂委員会『70万時間の旅Ⅱ』、108頁。
- (10) 前掲、JACAR: B04012268800（第33画像目から）。
- (11) 『中華日報』MF、1942年11月2日付け。
- (12) 郭秀峰「汪精衛涼亭撕字」、『鐘山風雨』2003年第2期、江蘇省政協文史委員会、49頁。
- (13) 前掲、JACAR: B04012268800（第30～31画像目、第45画像目から）。
- (14) 前掲、林正義編『大東亜博覧会記念写真帖』。
- (15) 右側の油彩画のテーマはそれぞれ、香港攻略、マレーのジョホールバル進攻、マレー海戦、パクリバパン攻略、タイの舞踏、ジャワ島のバンドン突撃、平穏な状況下のバリ島、ソロモン海戦であった。一方、左側の油彩画のテーマは、ハワイの真珠湾攻撃、マニラ陥落、ボルネオ油田地帯攻略、米国の航空母艦であるレキシントン沈没に際しての潜水艦の活動状況、ヤンゴン大空襲、マンダレー陥落、フィリピンのコレドール要塞攻略、珊瑚海海戦であった。銭今葛「大東亜戦争博覧会速写！（上）」、『新申報』MF、1942年11月3日付け。
- (16) 蔡徳金編、村田忠禧他訳『周佛海日記』、みすず書房、1992年、1942年11月1日、日曜日、498頁。
- (17) 展示された捕獲兵器の内訳は、爆撃機が一機、戦闘機が二機、装甲車が一輛、小型戦車が一機、大蓄音機が一機、探射灯が一機、発電機車が一輛、測高機が一機、対戦車砲が一門、高射砲が二門、榴弾砲が一門、ゴムボートが一艘、給水車が一輛、軍用大型自動車が一輛、大型爆弾が一発、軽機関銃・重機関銃が二百挺余り、砲弾が多数であった。『中華日報』MF、1942年11月1日付け。
- (18) 『中華日報』MF、1942年11月2日付け。

- (19) 前掲、蔡徳金編、村田忠禧他訳『周佛海日記』、1942年2月28日、土曜日、431頁。太平洋戦争緒戦の段階において、周佛海は、経済評論家の山崎靖純が、日本海軍は質量ともに英米両国を上回っているだけでなく、造船能力及び飛行機生産能力においても英米両国に等しいと述べた際に、「生産力の点については、その言は誇張しすぎの嫌いはあるが、海軍の実力については、かなり事実に近いようである」という感想を抱いていた。同上、1942年3月2日、月曜日、431頁。
- (20) 謝遠達編著『日本特務機関在中国』、新華日報館、1938年、61～63頁。
- (21) 『中華日報』MF、1942年11月2日付け。
- (22) 『新申報』MF、1942年11月16日付け。
- (23) 中国部の写真や図表等による展示内容は、①大東亜戦争に対する国府の声明、②和平運動の進展、③経済復興の概況、④中央儲備銀行券の流通地域図、⑤還都後の教育の発展状況、⑥新国民運動八大綱領、⑦汪主席並びに国民政府要人の肖像、⑧国民政府の政治綱領、⑨国民政府を承認している各国の一覧表、⑩新中国の国防の発展、⑪清郷工作の進展図、⑫中国における音楽の発達（陳雲裳、李麗華、周曼華、袁美雲、顧蘭君、陳燕燕の六大スターの写真）であった。一方、日本部の写真や実物等による展示内容は、①製鋼所内部の壮観、②建造された軍艦の進水、③新鋭の戦闘機の絶えざる生産と強力な空軍の編成、④大日本航空青少年隊の隊員、⑤日本空軍による敵に対する勇敢なる撃退、⑥東亜の敵を粉碎する日本軍の兵器（機関銃の装備、大砲砲身の製造）、⑦日本の科学、⑧日本の文化（桜、お城、仏像、富士山、健康的で美しい現代の日本女性など）であった。銭今葛「大東亜戦争博覧会速写（下）」、『新申報』MF、1942年11月4日付け。
- (24) 前掲、JACAR: B04012268800（第39～40画像目から）。
- (25) 具体的な展示内容は、①日本軍の平和的なベトナム進駐、②スマトラ島の平定、③マニラの我等東亜への復帰、④ボルネオ油田の復興、⑤日本軍のボルネオ進撃の進路、⑥南洋資源表、⑦日本軍のビルマ進駐と新生ビルマの絵図、⑧大東亜戦争の概況。前掲、銭今葛「大東亜戦争博覧会速写（下）」。
- (26) 前掲、乃村工藝社 社史編纂委員会『70万時間の旅—II』、108頁。
- (27) 前掲、JACAR: B04012268800（第18画像目から）。
- (28) 『中華日報』MF、1942年11月2日付け。
- (29) 前掲、乃村工藝社 社史編纂委員会『70万時間の旅—II』、93頁。
- (30) 新民会については、堀井弘一郎「新民会と華北占領政策（上）（中）（下）」、『中国研究月報』No. 539, No. 540, No. 541、中国研究所、1993年1月、1993年2月、1993年3月を参照のこと。
- (31) JACAR: Ref. C04014746900（第20画像目から）、大東亜建設博覧会後援の件、防衛省防衛研究所。
- (32) 友松「日本紹介 参加大東亜建設博覧会帰後記」、『新民週刊』第25期、1939年6月、24～27頁。
- (33) 中華民国重要史料初編編輯委員会編『中華民国重要史料初編—対日抗戦時期 第六編 傀儡組織（三）』、中国国民党中央委員会党史委員会、1981年、942～943頁。
- (34) 前掲、JACAR: B04012268800（第52画像目から）。もっとも鷹尾中尉は回想において、入場者数をのべ約六十万人とし、入場人員の四分の一近くを日本の将兵が占めているのではないかと推測していた。前掲、乃村工藝社 社史編纂委員会『70万時間の旅—II』、113頁。ちなみに、上述の天津における大東亜博覧会では、入場券購入者総数だけでも四十三万三千

強に達し、優待入場者数を加算すると五十万を突破するとのことであって、しかも「入場者の大多数が有識階級を以て占められたる」とされていた。前掲、林正義編『大東亜博覧会記念写真帖』。

- (35) 前掲、JACAR: B04012268800 (第52画像目から)。ちなみに大東亜戦争博覧会の入場料は、大人が一人につき中央儲備銀行券で一元、子供が一人につき同銀行券で五角であった。前掲、銭今葛「大東亜戦争博覧会速写! (上)」。
- (36) 『中華日報』MF、1942年11月17日付け。
- (37) 『中華日報』MF、1942年11月1日付け。
- (38) 『中華日報』MF、1942年11月20日付け。
- (39) 葉徳礼「秋夜読書」、『上海徐匯中学卅一年度学業成績展覽会紀念冊』、上海図書館所蔵、44頁。
- (40) 董時鼎「不要看輕了小孩子」、同上、45頁。
- (41) 前掲、郭秀峰「汪精衛涼亭撕字」、49頁。
- (42) 演劇場での興行プログラムの充実振りの一例を挙げると、11月6日から15日までの予定は次の通りであった。6日女性歌手の歌謡コンサート(中華戲茶庁)、7日新劇(大学劇団の魏建新など)、8日吹奏楽(国民政府軍楽隊)・雑戯・歌謡コンサート(映画スター)・歌謡コンサート(新国民劇団)、9日三角戯・魔術(新世界太平技術団)、10日女性歌手の歌謡コンサート(天香閣戲茶庁)、11日歌舞(新国民劇団)、12日揚州劇(新中国劇場)、13日女性歌手の歌謡コンサート(全安戲茶庁)、14日新劇及びその他(飛龍閣劇場)、15日吹奏楽(海軍軍楽隊)・歌謡コンサート(映画スター)。『新申報』MF、1942年11月3日付け。
- (43) 南京特派員 錢人平「大東亜博覧会花絮」、『新申報』MF、1942年11月16日付け。
- (44) 『新申報』MF、1942年12月10日付け。
- (45) 前掲、JACAR: B04012268800 (第44画像目から)。